
BHT ~ 隻眼の天使 ~

高橋 A 全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BHT 〈隻眼の天使〉

【Nコード】

N9657Z

【作者名】

高橋A全

【あらすじ】

家族をうしなって行き場をなくした少女は、資産家の令嬢のご厚意で、メイドとして働かせてもらえることになった。忙しくも心休まる日々が続いたが、それもつかの間のこと、大恩あるお嬢さまに危機が迫ると知らされる。なんとかしようと困惑する少女の前に、凄腕のメイドがやってきて……。

むらむらしているBと、よたよたしているHTが繰り広げる、まったりとしたメイド系コメディー！。

ブローグ（前書き）

<注意喚起>

コメディー要素は割と弱めだと思われます。
ですが、ジャンル分けで他に該当するものはありません。
結果としてコメディーで投稿しております。
お読みになる前に、その点をご了承ください。

プロローグ

大好きだった、お父さんが、死んだ。

突然あらわれたのは、黒ずくめの男のひとたち。

「遺体の確認をしてもらいたい」

それが、彼らの言い分だった。その口調はきわめて事務的で、感情というものを感じさせることがなかった。だから、わたしも何も感じることはなかった。

これは夢か何かで、現実ではない、わたしはそんな風にしか感じていなかった。

彼らに連れられて霊安室へと向かう最中も、わたしはずっとふわふわとした非現実的な感覚に支配されていた。

暗い部屋。

寒い部屋。

狭い部屋。

白い布がめくられて、白い肉体があらわになる。

見慣れない顔。まるで違う顔。

お父さんはこんな顔をしていない。そう思ったから、別人だ、としか思えなかった。

そのひとのほほに、触れてみた。

ぐにやぐにやとした、奇妙な感触。やっぱりちがうひとだ、とわ

たしは感じていた。

「これなら大丈夫じゃないか」

男のひとがつぶやく。

わたしに聞こえないようにして、ひそひそと会話がかわされた後で、別の男のひとが、ささやくように言った。

「写真を見ますか？ 無理に、とは言いませんが」

口調とは裏腹に、その表情と声は、強制的だったように記憶して

いる。

差し出される写真に、目を落とした。

上の方からぶら下がった縄。その縄が巻きついている首。だらりと垂れ下がった体。

わたしの視線が、遺体の顔へと固定される。突き出そうになっている眼球。実際に突き出されている舌。紫色になっている顔の皮膚。それは、今まで見たニンゲンの顔の中で、いちばんひどいものだったけれども、わたしには分かった。わたしには分かってしまった。写真にうつる、天井からぶら下がった物体が、まさにお父さんである、と認識された瞬間、わたしの中で何かがはじけた。

壊れて、砕けて、爆発した。

視界がぐにやりと歪んで、とめどなく何かがからだの内側からあふれだしてきた。黒ずくめの男たちがしきりに何かを口にしていたが、わたしには何も聞こえなかった。まるで超大型の台風のようなすさまじいまでの何かがわたしの中で荒れ狂っていた。

大好きだったお父さん、優しくったお父さん。いつもわたしの味方だったお父さん。

お父さんの笑顔が、永遠に続くかと思われるほど何回も、繰り返したしの目の裏に、スライド写真のように映し出された。

気がついたとき、わたしはソファアの上に寝かされていた。

「やっぱり見せない方がよかったかな」

男のひとたちの会話がぼそぼそと聞こえてくる。

はつきりと覚えているのは、そこまでだった。

この後のわたしの記憶は途切れ途切れになっていて、まるでテレビのチャンネルを頻繁に変えたときのように、飛び飛びになっている。何度も耳にしたのは、

「ご親戚は？」

という言葉だった。わたしは首を横に振ることしかできなかった。お父さんが勤めていた会社の方でも、親族の連絡先は知らなかったらしい。後になってから知ったことだけど、お父さんは結婚する

ときに親族と大喧嘩をしてしまい、親戚一同から絶縁されていたよ
うなのだ。

お母さんはすでに亡く、ただひとりの家族であったお父さんが自
殺してしまっただけ、わたしはひとりきりだった。ときおり、中学
校の担任の男の先生が、困ったような顔で付き添ってくれているだ
けだった。

お父さんのお葬式のこととか、お墓のこととか、そんなことを聞
かれても、わたしには分からなかった。まして、お父さんが管理し
ていたお金のことなんて何も知らなかった。

ゾウワイとか、オウリヨウとか、そんなものは、わたしは理解で
きなかった。

カタクソウサクと一方的に言われて、自宅は乱暴なひとたちによ
って踏み荒らされた。

「お父さんは、そんな悪いことはしていません」

そうつぶやいて、わたしはただうつつむくことしかできなかった。

大家さんは、「今すぐにでも出て行ってほしい」と、言った。

わたしが首を振ると、「さすがに犯罪者の娘は恥知らずだ」と、
怒鳴られた。

どうしたらいいのか分からなかった。

大家さんだけではなく、マスコミだと名乗る人たちも、家にやつ
てきた。電話や玄関のベルが鳴り続けて、わたしはおふとんの中
でずっと震えていた。

お父さんの遺品をかたづけようとしても、思い出すのが怖くてさ
われなかった。

わたしは、家の外へと逃げた。明日のことはもちろん、今日のこ
とすら考えることができないままに、わたしは公園のブランコに、
ひとり座り込んでいた。

とにかく、わたしはお父さんに会いたかった。

泣きそうになって、何度もそれを我慢した。

『わたしは泣かない』

それは、お母さんが死んだときに、お父さんと約束したことだった。

お父さんが死んでしまった今となっては、約束だけでも守らなければならなかった。

こぼれそうになる涙と戦い続けるうちに、あたりは暗くなり始めていた。どうすることもできないままに、わたしが顔をあげたときのこと。

音もなく、一台の真っ赤な車が公園の入り口に止まった。

大きくて、すごく高そうな車だった。スーツ姿に制帽をかぶり、丸メガネをかけた若い女性が、運転席から降りてくると、後部座席のドアをうやうやしく開けた。

そのときのことを、わたしは今でもはっきりと覚えている。

運転手の女性が差し出した手に、みずからの白い手を重ねた人物が、ゆっくりと落ち着いた動作で大地に降り立った。

舞い降りた、といった方が正しかったかもしれない。

車から現れたのは、ひとりの女のひと。

流れるような美しい長い髪。すらりとした長身。抜けるように白いその肌。一流の彫刻家がつくりあげたかのような、完璧な顔立ち。左目に、なぜか白い眼帯をつけていたが、それすらも神々しい装飾品にしか見えなかった。

わたしの目は、吸い寄せられるようにその女のひとに釘付けになった。

わたしは、天使に会った。

その女のひとの背中に、白い羽が生えていないのがとても不思議だった。

その天使さまがわたしの方へと、ゆっくりと近づいてくる。

心臓が、ばくばくと高鳴るのがわかった。呆然と、いや陶然として眺めるだけのわたしの前で、天使さまが足を止めた。レースの手

袋に包まれた手が、わたしに差し出される。

「さあ、いらつしゃい」

言われるがまま、わたしは、うやうやしく天使さまの手をとった。

「おーい雪ん子、どうだい？　だいぶ、慣れてきたんじゃないのか？」

わたしは、背後から声をかけられて振り返った。声の主を確認すると、目線を上の方に向ける。そのひと、清水拭乃さんは、わたしよりも頭ひとつ以上も背が高いからだ。

「えと、そう、ですね。慣れてきた感じはします、よ？　でも、まだ皆さんにご迷惑をかけてばかり、ですけど……」すこし考えたあとで、正直に答える。

「いや、そんなことはないぜ。けっこう助かってるよ」わたしと同じメイド服を着ている拭乃さんは、手にしていたモップの柄をくるくると手の中で回すと、ニツ、という感じで笑顔を見せた。「たしか……そろそろ三週間になるんだっけか？」

「えと、そうです。ここにきて二十日目になりますから」わたしは両手の指を折った。

「数えてるのか、雪ん子らしいぜ」

拭乃さんは、けらけらと笑った。その笑顔は、長身や短髪とあいまって、ボーイッシュな印象を強く受ける。とってもカッコいい。もし、わたしが通う中学校に在籍していたら、むしろ女の子からのラブレターをいっぱいもらいそうな、そんな感じの女性だ。

その拭乃さんが、いじわるそうなのに、不思議と魅力的な笑顔で言う。

「そうだ、あと十日したら、一ヶ月記念、ってことで、みんなでお祝いでもするか？」

「え、え……そ、そんなのいりませんよお」

顔が、すこし赤くなるのがわかった。拭乃さんはわたしのことをからかっているのだ。それくらいのこととはわかる。

わたしはゴミ袋の口を結びながら、照れかくしのために笑って訊

いた。

「つぎ、何をしましょう、か？」

拭乃さんは、もう一度モップをくるくると回した。「そうだなあ、掃除はもういいから、菜花を手伝ってくれるか？」

「はい、わかりました」わたしは、ペコリと頭を下げた。

わたしが、ここのお屋敷にお世話になるようになってから、そろそろ三週間になる。

天使のお嬢さまから『自分のメイドになってほしい』と言われ、はじめはただビックリした。そもそも、あまりにも唐突なお話であつたし、くわえて、メイドさんなるものが、どんなものなのか、わたしにはよくわからなかったからだ。

それでも、何しろわたしには行くあてがなかったし、生活のあてもなかったから、とにかく話を聞くだけでもよいかな、と思ってお屋敷にやってきたのだった。

そこで、いきなりメイド服に着替えさせられてしまった。

わたしがおろおろしているあいだに、こまごまとしたことは、すべて処理されたみたいだった。家にあつたはずの、わたしの私物とお父さんの遺品は、いつの間にやらお屋敷に運び込まれていたし、賃貸物件だつたおうちの退去手続きも終わっていたのだ。

呆然としていた時間が過ぎたあとで、わたしは冷静さを取り戻した、つもりだった。

いくらなんでもさすがにこれは、と思つて、あわてて部屋から廊下へと出たところで、天使のお嬢さまに出くわした。

「これから、よろしくお願いね」

極上の、天使さまの微笑みが、まさに目の前にあつた。

気がついたとき、わたしは自然な動作でうなずいてしまっていた。そのあと、冷泉添華さん——このひとはお嬢さまの秘書だ——という、黒っぽい色あいのスーツを着た、クールな感じの女のひとが、別室で色々と説明してくれた。

この大内家は、かなりの資産家であること。

大内家が所有している会社も、いっぱいあること。

わたしのお父さんは、そんな会社のひとつで働いていたこと。

お父さんと、天使のお嬢さまには、わずかだが面識があったこと。何かあったとき、娘の小雪のことをお願いします、とお父さんから頼まれていたこと。

「幸いにも、夏休みに入ったばかりです。さまざまなのが落ち着くまで、このお屋敷にいた方が良いと思いますが」

添華さんの口調は沈着で、説明は的確だった。とてもたくさんの情報を、頭の中で整理するのにすこし時間がかかってしまったけれども、最後にわたしは同意した。

「とりあえず、夏休みが終わるまで、お世話になります」

そう言って、わたしは頭を深く下げた。

そのとき、『夏休みになったら、一緒にディズニーランドに行く』というお父さんとの約束が、永遠にお流れになったことを、わたしは思い出していた。

お父さんが死んだ、ということを知り、わたしはあらためて実感していた。

涙をこらえるのに、ちょっぴり努力が必要だった。

『菜花を手伝ってくれるか？』

と、清水拭乃さんに言われて、わたしが向かった先はお台所だった。

鍋島菜花さんは、お屋敷のお料理全般を担当しているメイドさんである。

まだ二十歳かそこらなのに、和食・洋食・中華にデザートと、ひとりでなんでも作れてしまう名コックさんなのだ。

菜花さんを手伝うということは、お料理を手伝うということである。菜花さんの腕前を近くで見られるので、わたしにとっても色々勉強になることが多いし、何よりわたしもお料理が好きだから、お手伝いをするのが一番好きだった。

「菜花さん、失礼します、よ？」わたしはペコリと頭をさげる。

ふたつのおさげを揺らして、菜花さんが振り向いた。「あ、こゆちゃん、いらっしやい」

「あの、拭乃さんに言われて、お手伝いを」

「あら、ありがとうね」菜花さんが、にっこりと微笑んだあと、ふちの太いメガネの奥の両眼を天井に向けて、すこし考え込んだ。

「うーんと、じゃあ、そこのおじやがの皮を、しゅるしゅるとむいてくれる？」

「はい、わかりました」

わたしは、水洗いされてざるに載っていたじゃがいもを取りあげると、用意されていたピーラーで皮をむいていった。結構な量のじゃがいもなので、丁寧かつ手早く作業しなければならない。

量が多いのには、理由がある。

いま、このお屋敷には、わたしたちメイドさんを含めて八人がいるのだ。お嬢さまのお食事は、菜花さんが最初から最後まで腕によりをかけるので別格としても、まかないだけでも七人分つくらない

といけない。つまり、わたしの目の前にあるのは、のこる七人分のじやがいもということになる。

ピーラーで大まかに皮をむくと、わたしは包丁に持ちかえた。刃の角のところを使い、芽の部分を取り除いていく。ここを丁寧にやらないと、おいもの大きさがどんどん小さくなってしまうので、わたしはすこし緊張した。

菜花さんがにつこりと笑った。「やつぱりこゆちゃんは上手ね。たすかるわ」

「え、え……そ、そんなことないです、よ？」ちよっぴり顔が赤くなる。

「でもねえ、前にふきちゃんに手伝ってもらったときは、おじやがが立方体になってたわ」

「拭乃さん、お料理苦手なんです、か？ お掃除はあんなに得意なのに」

「苦手というか、あまり好きじゃないみたいなの。清掃員じゃなくてメイドなんだから、仕事に好き嫌いはダメよ、って言うてはいるんだけどね」

「はあ、なるほど」そう応じながら、わたしはメイドさんについて考えていた。

このお屋敷にいるひとたちは、メイドという呼び方をしているけど、実際のところ、ふつうの家事手伝いと変わらないのかな、とわたしは感じていた。しいて言えば、服装がメイド服というだけのことである。

わたしは父子家庭で育ったけど、お父さんはお世辞にも家事が得意とは言えなかった。わたしは小さいころから、お母さんの代わりに家事全般をやっていたので、得意とはいえないにせよ、ほとんどの家事には慣れていた。

だから、菜花さんが言ったことは、正しいのだ、とわたしは思った。

わたしなんかでさえ、ひととおりはそれなりにできる。だから、

家事というのは才能の有無はあまり関係なくて、慣れているかどうか大きいのだと思えた。菜花さんの『好き嫌いはダメ』というのは、たぶんそういう意味なのだ、と思う。

じゃがいもの皮むきが終わると、今度はにんじんを手にとった。同じようにピーラーで皮をむく作業に専念する。あつちのボールに玉ねぎがあるのを見ると、どうやら今夜のまかないはカレーライスではないか、とわたしは判断した。

すると、お嬢さまのお夕食はポトフかな、とわたしは想像した。

お嬢さまがカレーということはあり得ないからだ。別に、カレーがお嫌いということではない。刺激の強いものは食べてはいけならしい、のだ。詳しい理由は知らない。

詳しい理由は、知ってはいけない。

『お嬢さまのプライベートに関しては、あまり訊いてはいけない』お屋敷の中には、そういう空気が漂っている。

そのことは、ここに来てもないわたしにも、わかっていた。

そういう微妙な空気を読み取る力は、お父さんの事件があつてから、だいぶん上達したのではないか、とわたしは感じていた。原因といい経緯といい、結果に自信をもつてよいことなのかどうか、わからないけれども。

にんじんの皮をむきおわって、わたしは玉ねぎをチラリと見た。

たぶんつぎは、あれをきざまないといけないのだと思うけど、正直なところ目が痛くなるのはつらい。こういうときは、メガネをかけている菜花さんが、すこしうらやましくなる。

そんなとき、台所の外の方から、ピーピーという機械音が聞こえてきた。

「あ、お洗濯が終わったみたいだから、るるちゃんのところに行つてあげて」

「はい、わかりました」

内心で胸をなでおろし、玉ねぎにバイバイをすると、わたしはペコリと頭をさげた。

わたしがサンダルに履きかえて、中庭に出たところで、洗濯かごを両手で抱えている、河野流瑠ちゃんと出くわした。

「あ、流瑠ちゃん、お手伝いにくたよ」

「おっ、サンキュー、ゆっきー。ちょうどいま、脱水がおわったところだよん」

流瑠ちゃんはウインクしてみせると、ショートカットの髪を揺らし、ニカツと笑った。流瑠ちゃんはいつも元気いっぱい、一緒にいると、わたしも元気になるように思えて、ちよっぴり嬉しくなる。流瑠ちゃんは、わたしと年がひとつしか変わらない。

つまり、中学三年生のはずで、そんな若さでこのお屋敷に住み込みで働いている。何があつたのか、わたしはもちろん訊かなかったし、流瑠ちゃんの方も、わたしに何があつたのか、たずねることはなかった。

だけど、なんとなくだけど、心の奥底の方では通じるものがあるのではないか、とわたしは感じている（一方的にだけ）。流瑠ちゃんの方が年上だし、メイドさんとしても先輩だけど、『ちゃん』付けで呼ぶことを許してくれたし、わたしもそれに甘えていた。

「よっ、こら、せつと」

「よいしょ、つと」

ふたりで掛け声を合わせて、お洗濯ものを運んでいく。行く先は二階にある、乾燥専用のお部屋だった。

わたしはこのお屋敷にくるまで知らなかったのだけど、こういう高級住宅街では、お洗濯ものを外に干してはいけない、のだそうである。

景観上の問題らしいのだけど、お洗濯ものをおひさまの下で干せないのは、何となく残念になる。さすがに、シーツとかタオルとかは乾燥器にかけるけど、こまごまとしたものや、痛みやすいものは

室内に陰干しすることになる。お部屋を暖気して、換気することで乾かすのだ。

じつは、このお洗濯と乾燥が、かなりの重労働である。お掃除やお料理にくらべると、体力の消耗がはげしい。気がついたときにはふうふうと汗をかくことになる。それでもこれが終われば、ちょっとひと休みできるのだ。

お掃除、お料理、お洗濯。

こうやって、色々と体を動かしていると、思っているよりも時間がたつのが早い。

この一ヶ月ほどは、わたしの生活はこんな感じだ。お屋敷にいるメイドさんたちの、誰かしらのお仕事をお手伝いしているのだ。

もちろん、お手伝いできないものもある。

たとえば、メイドの安国寺智恵さん。このひとは事務処理を担当していて、しかもお嬢さまの家庭教師的な立場を兼任している。

なので、智恵さんではなくて、智恵先生とお呼びすることが多いのだけど、このひとのお仕事はお手伝いできない。事務として扱っている書類には、ときとしてマル秘な内容のものも含まれるからだ。むしろ逆に、

『安国寺さんのお部屋には、勝手にはいらないように』

と、秘書の冷泉添華さんからきびしく言われているくらいだ。部屋の前に出している、シュレッダーされた書類のゴミを片付けるくらいは、許されているけど。

あとは、丸目輪さんのお仕事も、わたしではちょっとお手伝いできない。そもそも、輪さんはメイドさんではなくて、運転手さんである。あるとき公園に止まった、真っ赤な高級車（お嬢さまの専用車だ！）を運転するのが、まさに輪さんの仕事なのだ。

しかも運転するだけではなくて、車の整備も自分でやっている。さらに整備できるのは車だけではなく、機械全般におよぶ。おつきなどところでは電動式の扉とか、業務用だと思われる大きさの冷蔵庫や洗濯機など。ちっちゃなところではパソコンやミシンはもちろ

ん、腕時計の修理までなんでもござれなのだ。

女の子で、しかもまだ十代なのに、輪さんは機械にめっぽう強い。自慢ではないけど、わたしなんかは、ビデオの予約録画の操作にも自信がない。機械はダメ。だから、輪さんのお仕事はお手伝いできないのだ。なんか、わたしが触ると、機械が色々と壊れてしまいそうなきさえるし。

あとは言うまでもないけど、秘書をされている添華さんのお手伝いなんかは、とんでもないことなので、とても無理なお話だった。

だから、わたしができるお手伝いは、次のみつ。

清水拭乃さんのお掃除。鍋島菜花さんのお料理、河野流瑠ちゃんのお洗濯。

たったそれだけのことだったけど、みなさんのお仕事をお手伝いしていると、けっこう忙しい。なので、余計なことを考えずに済むのが良い。

心が苦しいときには、へとへとになるまで体を動かしてしまえば、すこしは楽になる。

これは、このお屋敷に来てから学んだことだった。

すくなくとも、何も考えずに、ぐっすりと眠ることができる。

それが、その場のぎの逃げにすぎないとわかっていても、いまのわたしにとっては、とても大事なことであるかのように、思えるのだった。

それから、しばらくたってからのこと。

鍋島菜花さんが、やかんを火にかけて言った。「じゃあ、すこし休憩にしましょうか」

「輪さんもお呼びします、か？」わたしは、拭き掃除の手を止めて訊いた。

あいかわらず、モップをくるくる回している清水拭乃さんが応じる。

「ああ、頼むぜ」

「あ、じゃあ、わたしが呼んできます、ね」わたしはふきんを流しのそばにおくと、駐車場の方へと足をむける。

菜花さんが休憩を提案した、ということは、それはつまり、お嬢さまたちが休憩をとった、ということなんだと、最近わかってきた。菜花さんがお嬢さまのお部屋にお茶を運んだあとで、わたしたちもお茶をいただく、という流れになっている。つまり、お嬢さまとわたしたちが同時にお休みを取るわけで、そうすることで、わたしたちが休んでいる間に、急に呼びつけられてお仕事を任される事態が起こりにくくなるのだ。

そうというのは、メイドさんとしての知恵なのかな、と思う。菜花さんは、高校を卒業してからこのお仕事についたとのことなので、まだ二年かそこらしかたっていないと思うけれども、このあたりの気の使い方はすごく上手だと思う。きっと、もともとそういう心配りができるひとなのだらう。

さて、駐車場についたところで、わたしは周囲を見渡して、丸目輪さんの姿を探した。

いつもだったらこのあたりで、お嬢さま専用の真っ赤な高級車を、整備しているはずのだけど……。

「あれ、れ？」わたしはびっくりして、思わず声をあげた。

手に付いた油汚れを拭き取りながら、輪さんが姿をあらわす。「

「おや、ゆきちゃん、どうしたスか？」

「あ、えと、輪さん、いま、お茶が入るので、お呼びしようかと思っただけですけど……」

わたしは、あとに続く言葉を飲み込んだ。

前にも言ったけど、お嬢さまに関する事は、訊いてはいけないことになっている。

くわえて、わたし自身がただの使用人、という立場である以上はお嬢さまとの関係の有無にかかわらず、あまり興味本位で余計な質問をしないように、そんなスタンスでいるように、と冷泉添華さんや弐乃さんから強い口調で教わっていた。

わたしは、そのお話は当然のことだと思った。

もちろん、お世話になってる身だ、ということもあるし、このお屋敷ではいちばんの新米だ、ということもあるけど、それら以上に理解できる部分もある。

というのは、わたし自身が、逆の立場というものを経験していたからだ。

お父さんの事件があつて、マスコミのひとたちは、『知る権利』なるものをふりかざし、あらゆる意味で一方的な質問を、わたしに嫌というほどあびせかけてきた。

興味本位の余計な質問というものが、どれほどひとを傷つけるのか、わたしはわかつているつもりだった。

だから今だって、のどまで出かけた言葉を、ごっくんしてがまんした。

どんなに知りたいからといって、簡単に訊いてよい、というものではないのだ。

そんなわたしの内心を、輪さんは表情から読み取ったのかもしれない。トレードマークになっている丸メガネの位置を直すと、輪さんの方から話題をふってくれた。

「お嬢さまの専用車が、いつの間にか二台になってるから、ピックアップしたスか？」

「え、え……まあ……そ、そんなところです」

顔のわりに大きな丸メガネの奥で、輪さんの目が笑っていた。「そんなにおっかなびつくりでなくても良いスよ、別に秘密っていうわけじゃないスから」

「よかったです、よ？ それを聞いて、とっても安心しました」

「で、どうスカ？ ゆきちゃん」

「どう、とは？」

「この二台、同じものに見えるスカ？」

一瞬、輪さんの質問の意味がよく分からなかった。けれども、わたしはちよぴり考えたあとで、二台の真っ赤な高級車を見比べて、正直に答えた。

「そう、ですね。ナンバープレート以外、同じように見えます、よ？」

「よし、それならオツケースな。じゃあ、お茶をいただきにいくスね」

わたしの頭には、まだハテナマークが点灯していたけれども、輪さんの方がすぐに話題を変えてしまった。

「ところで、洗濯機の調子はどうスカ？」

「あ、それなら、流瑠ちゃんが調子良いって言っていましたよ。すごく喜んでました」

「そつスカ。でもあれ、年代物スから。私がしたのは応急処置スカら、そのうちまた調子悪くなるかもスね。早めに業者さんと呼んだ方が良いかもスよ」

「年代物ということとは、かなり古いものなんです、か？」

「お嬢さまが生まれた年に買ったみたいスな」

「それは……」と言いかけて、わたしは言葉につまった。ここで古いとか年代物とか言うのと、間違いなくお嬢さまに非礼であるにちがいないからだ。

そんな、ときまぎしているわたしの様子を見て、輪さんはニヤリと笑った。

しばしの間、みんなで休憩しながら、菜花さんが淹れてくれたお茶をいただいた。

『休憩をしつかりとすることも、大事な仕事のひとつです』

このお屋敷にきたとき、秘書の冷泉添華さんから、わたしはそう教わった。最初は意味がよく分からなかったけれども、今なら何となく分かる。

つまり、メイドさんには基本的にお休みがない、ということなのだ。

いちおう、労働基準法にもとづいて、週に一度はお休みが入ることになっている。でも型どおりにお休みが取れないのは、どうみても明らかなのだ。

たとえば、料理を担当している鍋島菜花さんがお休みしてしまえば、お料理を作る人がいなくなってしまう。もちろん、わたしを含めた他の四人は、まったく料理ができないわけではない。それでも、まかないならば何とかなくても、お嬢さまのお食事だけは、もうどうにもならない。外で作ってもらったものを持ってくるか、あるいは料理人さんに来てもらって、作ってもらうことになる。

今のところは、お嬢さまが気をつかって、週に一度は外食をしてくださっているのだ、なんとか菜花さんはお休みが取れている状況なのだ。

これは運転手の丸目輪さんにも言えることで、お嬢さまの方から、『お出かけしない日』というのを決めていただいて、そこに休みを入れる。

お屋敷はお庭がとても広いから、掃除担当の清水拭乃さんにしたって、ほとんど余裕はない。洗濯担当の河野流瑠ちゃんはずこし余裕があるけど、そもそも彼女はまだわたしと同じ中学生だし、三年生だから受験も控えているはずなのだ。新学期になれば、色々と手

一杯になるにちがいがなかった。

だからこそ、休憩なのだと思う。もともとギリギリの状況なのだから、誰かが体調を崩すと大変なことになってしまうのだ。体調管理は、万全でなくてはいけない。

「最悪の場合はさ、まあ応援を呼べないこともないと思うけどさ」
拭乃さんがお茶をすすりながら言った。「このお屋敷のしきたりをよく知らないやつが来てもさ、うまくいかないだろ？ 結果的に、お嬢さまに迷惑はかけることは、したくないぜ」

わたしはうなずいて、カップを口に当てた。

さすがに大内家はお金持ちで、使用人が飲む紅茶もおいしいものを使っている。どこがどう、と詳しく訊かれると困ってしまうけど、おいしいのだけは、わたしでもわかる。それくらいのはつきりとしたちがいが、そこにはある。

不意に、使用人の食堂の壁が、コツコツと軽く叩かれた。みんなの視線が集まる先に五人目のメイド服の女性があらわれる。

「あらあら、みなさんここに居たのね」

「あ、智恵先生。なにかご用です、か？」わたしは、ぴよこんと立ち上がった。

そんなわたしの様子を見て、安国寺智恵先生が、おっとりとした。「そうじゃないわ。わたくしもお茶をいただくかしら、と思つてここにきましたのよ」

「え？ でも、さきほど安国寺先生の分も含めて、お嬢さまのところへ三人分をお持ちしましたよね？ ……もしかして、お茶に何か問題でもありましたか？」菜花さんが、すこしだけ目をまるくしておさげを揺らしながら訊いた。

「ううん、そうじゃないわ」智恵先生が、もう一度笑った。「どうやら、おふたりだけでお話しされたいことがあるみたいで、あたくしは席を外してきましたの。それで、お茶をいただきそこねてしまつて」

「そうですか、それならすぐご用意しますね」菜花さんが、ホッと

した顔になる。

わたしも手伝って、もうひとり分のお茶を用意すると、智恵先生に渡した。

智恵先生は、みたびおつとりと笑った。「ありがとう、小雪さん」
智恵先生は、ここにいるメイドさんの中では、いちばんの古株になるらしい。

古株、といっても、まだ二十代半ばのはずだった。お嬢さまが外出される際には、当然のように添華さんもおともをするので、おふたりが不在のときには、智恵先生がメイド長のようなかたちで、ご指示を出されることになる。そんな立場のひとつだ。

そう言えば、さつき『小雪さん』と呼ばれて思い出したけど、このお屋敷のひとたちは、わたしのことを呼びたいように呼ぶ。

拭乃さんが『雪ん子』で、菜花さんが『こゆちゃん』、流瑠さんが『ゆつき』となる。さらに輪さんが『ゆきちゃん』で、智恵先生が『小雪さん』になる。

はじめのうちはかなり戸惑ったけど、慣れてくると逆に楽になった。名前を呼ばれたとき、誰に呼ばれたのかすぐに判別できるからだ。

ちなみに、お嬢さまと添華さんは『陶さん』と苗字で呼びになるのだが、このふたりに直接お呼びいただくような機会はほとんどない。幸いなことに、呼ばれてしまうようなことは（まだ）何もしでかしてはいなかった。

おいしいお茶と、おいしいお茶菓子。

しばらくの間、六人が集まった食堂で、歓談が続いた。

ゆるゆるとした、暖かくておだやかな時間が流れていく。

ここにきて良かったかもしれない、とわたしは心から感じていた。ティーポットが空になったところで、みんなが仕事に戻っていく。いつもと変わらない日常、このときのわたしは、そんな風に考えていた。

風雲急を告げたのは、太陽がいちばん高くなった頃だった。

お庭をせつせと掃いていたわたしは、突然、清水拭乃さんにつかまった。

「雪ん子、いそいで菜花の手伝いをしてくれ」

「あ、そろそろお昼ごはんですもんね」

「そんなことじゃねえよ！」

こんなに険しい表情の拭乃さんを見るのは初めてだったので、わたしは思わず固まってしまった。返事をしようとしたが、うまく声が出ない。

そんなわたしを見て、拭乃さんがバリバリと頭をかいた。「……大声出して悪かったな。けどな、ちつとばかりマズイことになったんだ」

「え、え……さ、菜花さんが倒れてしまったと、か？」

「菜花には悪いが、その方がまだ気が楽だぜ。あのな、雪ん子、よく聞けよ。ご主人さまが急に来ることになったんだ」

「……？ 『ごしゅじんさま』？」

「お嬢さまの、お父上のことだよ」

お嬢さまのお父さんについては、ここにお世話になるときに、秘書の冷泉添華さんから最低限のことを教えてもらっていた。

大内義貴。

たった一代で財をなしとげた、大内コンツェルンの総帥。

とてもお忙しい方でもあるし、お嬢さまでさえお会いするときには『本邸』の方へ出向かれるので、まあお会いする機会はないでしょうが、というのが、添華さんの説明だったと記憶している。

わたしは我慢できなくなって、拭乃さんに訊いた。

「あの、怖いひとなんです、か？」

「あれは怖いなんてもんじゃねえな。覚悟しといった方がよいぜ」

そう言われてお尻をたたかれたわたしは、小走りにお台所に向かった。そこにいた、鍋島菜花さんの顔もすこし緊張している。

「来客用の、いちばん高いティーカップを出したいの。戸棚の奥にあるから、手伝って。ゆっくりで良いから、絶対に壊さないようにね」

わたしは返事をする、菜花さんを手伝った。

戸棚のガラス戸にうつる自分の顔も、いつの間にかとても堅苦しいものになっていて、まるで別人のようになってるのがわかった。ふたりで何とか無事に作業を済ませたあたりで、廊下の方から、二種類の靴音が聞こえてきた。片方は音が高いので、冷泉添華さんのヒールのものだとわかる。

その添華さんが、お台所の入口までやってくると、腕組みをして中を一瞥した。「鍋島さんと、陶さんのふたりだけ？」

「はい、そうです」菜花さんが応じる。

添華さんは仮面のような表情で続けた。「河野さんは？ 見てない？」

「申し訳ありません、わかりかねます」菜花さんが、軽く頭をさげる。

添華さんの鋭い視線が、わたしの方に向けられた。「陶さんは、ご主人さまにお会いするのは、はじめてですね？」

「え、え……そ、そうですけど」

おろおろしているわたしに構わず、添華さんは隣にいる智恵先生の方をむいた。「河野さんも、おそらく、はじめてですね？」

「そう思いますわ。ご主人さまがお見えになるのは、一年ぶりですから。外でお会いしていない限り、はじめてになりますわね。……流瑠さんのこと、探してきましたようかしら？」

緊張しているが、柔らかさを残している声で智恵先生が応じる。

「お願いするわ」

添華さんが首肯すると、左手首の内側にある時計を見た。

「それから陶さんは、五分後に私の部屋にきてください。ご主人さ

まへのご応対の手順やお作法に関して、話をします」

「あ、あ……は、はい、わかりました」

廊下に向かいかけた添華さんが立ちどまり、首だけをこちらに向けた。

「それから先に言っておきますが、ご主人さまの前で、そのような返事をしないように。はつきりしない態度を、ご主人さまは大変に嫌っておりますので」

ごくりと唾を飲み込んだわたしの耳に、遠ざかるヒールの音だけが聞こえていた。

そして、そのときがやってきた。

あとから丸目輪さんに聞いた話では、真つ黒な超高級車が三台も門の前に止まり、その真ん中の車から、ご主人さまは登場したのだという。

玄関の扉が開いた瞬間に、わたしも含めて、壁際に五人並んでいたメイドさんたちは、一斉に深く頭を下げた。

「ご主人さま、いらっしやいませ」安国寺智恵先生の合図に合わせ、五人で同時に言う。

頭を下げた姿勢のままのわたしたちの前を、ふたりの影が通り過ぎて行つた。お嬢さまと、冷泉添華さんだ。

「お父さま、よくいらっしやいましたね」天使さまのお声がする。

「ああ」男性の声。

わたしは自分のからだが、ぶるると震えるのがわかった。たったひとこと『ああ』だけだったけど、こんなにドスの利いた声を聞くのは初めてだった。背中を、冷たい汗が流れていく。

さつきとは逆の方向に、三人分の影が通り過ぎて行つたあとで、ようやくわたしの震えは弱まった。顔をあげたわたしの目に、お台所へ急ぐ鍋島菜花さんの後姿がうつつた。

清水拭乃さんに軽く背中をたたかれて、わたしたちも応接室へと急いだ。初対面のわたしと河野流瑠ちゃんは、ご主人さまにご挨拶をしないといけないからだ。

「失礼いたします」

一声かけてから、菜花さん以外の四人のメイドさんが室内に入る。応接室のソファーには、向かい合うようにしてお嬢さまとご主人さまが座っていた。

このとき、わたしは初めてご主人さまのお顔を見た。

髪の毛はライオンのたてがみのように勇ましく、顔は太陽のよう

にギラギラと光っていて、目つきは研ぎ澄まされた刃物のように鋭かった。

ひざが、かくかくと震えるのが、自分でもわかった。

お嬢さまのおそばに立っている添華さんと、わたしの視線が交差して、添華さんが小さくうなずいた。それが合図だった。いうことを聞かない足を懸命に動かし、一歩前に踏み出して、ご主人さまにごあいさつしようとした、そのとき――

「なんやっ。誰や、おまえは！」

ご主人さまの、一喝。

耳の奥の鼓膜が、じいんと震えるのが分かった。わたしに向けられたその視線が、胸の奥の方まで突き刺さっているような感じがして、わたしは動けなくなった。

ご主人さまのからだから湧き出るオーラのような何かが、わたしをぐいぐいと押しつぶそうとしているようにも思えた。

わたしは、懸命に口を動かす。自己紹介するべく、声を絞り出すとする。

ぱくぱくと、震える口が動くだけ。

声が出せない。息が吸えないので、空気も出てこない。

わたしにとって、永遠とも思える時間が過ぎようとしたとき、天使さまの優しいお声が聞こえた。

「お父さま、前にお話ししたはずですよ。新しいメイドさんが入りました、と」

「なんや、ろくに口もきけんやつやないか！ また、どこの馬の骨かもわからんようなもんを拾ってきたんかい。イヌやネコとはちゃうねんぞ！」

「お父さまの、部下だった方の娘さんですよ」

「ああん？」

「陶さんの娘さん、陶小雪さんです」

「す……え……。す、え……。ああ、陶。あの陶かつ」

『あの』という言い方が、お父さんにまつわる事件のことを、わ

たしに思い出させた。

真っ白な死体を目にしたときのことが、記憶の底の方からじわりと湧きあがってくる。胸が、ぎゅゅと絞られるような感じがした。強いめまいがする。倒れないように、足を踏ん張るのがやっとだった。

そんなわたしの隣に、すうつという感じで人影が重なった。

「お初にお目にかかります。河野流瑠と申します。半年前より、こちらでお世話になっております」

「ああ、そうかい、せやけど、そんなもん、どうでもええわ。お前ら、はよ出てけ」

ご主人さまが、ハエでも追い払うようにして手を振っている。このときのわたしは、まだ頭の中が真っ白だったが、拭乃さんに抱きかかえられるようにして、かろうじて外へと向かった。なんとか最後の力を振り絞って、頭をさげる。

「失礼いたします」

「おいこら、またんかい。安国寺だけは、ここに残れ」

わたしたちメイド三人を残して、応接室の扉が閉まった。

清水拭乃さんと、河野流瑠ちゃんに両脇を抱えられるようにして、わたしは応接室から離れた廊下の角っこまでやってきた。まだ固まっているわたしの背中を、拭乃さんが懸命にこすってくれた。流瑠ちゃんは手をさすってくれている。

ようやくふつうに呼吸ができるようになって、わたしは声を絞り出した。

「すみ、ま、せん……。ちゃんと、ごあいさつ、できません、でした……」

「気にすんなって、あれは向こうが悪いだろ？」

「そん、な……」

「大丈夫だぜ、ここなら声は聞こえないからさ。いきなり怒鳴られりゃ、どんなやつでもテンパっちまうもんだ」

「で、でも……流瑠ちゃんは、ちゃんとごあいさつしたのに……」

流瑠ちゃんが、わたしの頭をなでなでしてくれた。「それは順番が逆だったからだよん。もしわたしが先だったら、絶対おなじような状態になってたさね」

しばし、ふたりになでなでさすすしてもらっている間に、台車を押してくる鍋島菜花さんに廊下で出くわした。台車の上に湯気がただよっているのは、どうやらお茶の用意がしてあるためらしい。

「どうしたの？ どうして、ここに居るの？」

「どうもこうもねえぜ。あたしたちやハブられたのさ」

「ハブ？ によろによるの？ マングースとかの、ハブ？」

「お邪魔だから、出ていけって言われたよん。内緒話みたいさね」

「ああ、そういうことね。うんうん、父ひとり娘ひとりですもの、きつとつもあるお話でもあるんじゃないかな」

「……菜花ってさ、ときどき妙に神経が太くなるよな」

「あら、そうかなあ？」

おふたりのお話もそこまでだった。とつぜん応接室の扉が勢いよく開いて、中から四人の男女が出てきたからだ。男の人、つまりもちろんご主人さまだけど、振り向いて女性陣三人に何かを言っている。お嬢さまが軽く頭を下げているところを見ると、『見送りはしない』とか、そんな感じの内容だったのかもしれない。

ご主人さまが、添華さんと智恵先生をしたがえて、傲然とした足取りで、わたしたちの前を通り過ぎ、玄関へと歩いていく。わたしはさっきの感覚を思い出してからだが固くなったが、かるうじて、おじぎだけはちゃんとする事ができた。

玄関の方で、ご主人さまをお出迎えにきたのだろうか、複数の女性の声がしていた。

ちよつとしたやり取りのあとで、玄関の扉があいて、そして閉じた。静寂が戻り、いつもの（といってもここ三週間ほどだが）お屋敷の空気になるのがわかった。

玄関に力ギをかけた、添華さんと智恵先生が、わたしたち三人のところに戻ってくる。わたしがドキツとしたのは、お嬢さまですが、こちらにいらしたからだ。

驚いたことに、うつむいているだけのわたしの両手を、お嬢さまは握ってくださった。まるで芸術品のように美しい唇が開かれる。

「ごめんなさいね、初対面なのに、あんな風に言われて、驚いてしまったでしょう」

たしかに、わたしは驚いてしまった。まさかお嬢さまに、このようなお言葉をいただくとは思いませんでしたから。

「まあ、あの状況なら、泣き出さなかっただけでも上出来です」

今度は、添華さんの声がした。

智恵先生は黙って、わたしのことをぎゅうつと抱きしめてくれた。ええと、あの、別の意味で泣き出しそうなのですが。

お嬢さまの視線が、菜花さんが押している、台車の方に向けられた。

「それはお茶でしょうか？」

「はい、間に合いませんでしたが」

「なら、それを応接室までもってきてくださる？　みなさんの分の、カップも用意してくださいませんか」

菜花さんが、首をかしげる。「あの、全員分、ということでしょうでしょうか？」

「ええ、お茶でも飲みながら、みなさんと、すこし落ち着いてお話をしましょう」

お嬢さまが、いつ見てもまぶしい、天使の微笑をうかべた。

お嬢さまとお茶をいただくなんていうのは、初めての経験だった。もちろんわたしはけっこう緊張したけど、さっきまでのような、締め付けられるような不快感はなかった。おなじ大内のおうちの父と娘なのに、このちがいは何なのだろう、とわたしはちよっぴり考えてしまった。

そのお嬢さまが、応接室にいる全員を見わたす。

メイド五人、運転手ひとり、秘書ひとり、お嬢さまおひとりの、合計八人になる。そのあとで、冷泉添華さんに向かって、お嬢さまがうなずいてみせた。添華さんがお嬢さまに軽く頭をさげてから、紅唇をひらく。

「みなさんに、集まっていたいたのは、他でもありません。ご主人さまからの指示の、要点をかいつまんでお話するためです」

わたしは、じっと耳をすませて、そのつぎの言葉を待った。

「一時的にですが、このお屋敷に新たにメイドを入れることになりました。人数はふたりで、明日からしばらくのあいだ、住み込みでここにいていただく形になります——」

お嬢さまと安国寺さんは、すでにこの話を聞いていたみたいで、添華さんは、わたしを含めた残るメイドの四人と、丸目輪さんを見てから続けた。

「——要旨は以上ですが、なにか質問はありますか」

清水拭乃さんが、ちらりとわたしたちを見てから、手をあげた。

「そのふたりって、もちろん女性だよな？」

「当然でしょう、ここは男子禁制ですから」添華さんがすぐに返答する。

「このお屋敷にきてもらって、なにしてもらうのさ。いちおうさ、おれたちはちゃんと仕事をするつもりだけど……いや、訊くのがマズかったら、質問を取り消すぜ」

添華さんが、自分の女主人の様子をうかがった。それに対して、お嬢さまが、おおきくうなずくのを見てから、口をひらく。

「きていただいた方には、お嬢さまの、護衛をお願いすることになります」

「護衛？ それは、まさか……」わたしの目には、拭乃さんが、あとにつづく言葉をむりやりに飲み込んだ、ように見えた。

わたしは思わず部屋を見わたしてしまった。添華さんが『護衛』といった直後に、部屋の空気が急にこおりついた、そんな印象をうけたからだ。

そんな空気のなか、ひよい、という感じで、河野流瑠ちゃんが手をあげる。

「住み込み、ってことだけど、使ってもらう部屋とかどうするのん？ 客間つかうのん？ もしくは使用人よりの空き部屋とか、掃除しといった方がよいさか？」

「それは、きていただいてから決めることにします」

その添華さんの答えを聞いて、流瑠ちゃんのはかるく顔をしかめた。「さつきから、きて『いただく』って言うてるけど、来るのはエライひとなん？」

添華さんが、ふたたび自分の主人の様子をうかがい、お嬢さまが、ふたたびうなずきながら微笑をうかべる。添華さんが、わずかに緊張した声で言った。

「きていただくのは、ふたりとも『賢者のメイド』です」

「……えええええ！ 賢者って、あの『賢者』かよ」

びっくりした拭乃さんが出した、その大声にわたしはびっくりしてしまった。胸のドキドキをしずめながら、そっとみんなの様子をうかがってみる。

はじめて話を聞く五人のうち、驚いているのは拭乃さんと鍋島菜花さんのようだった。

残る流瑠ちゃんと輪さんの様子はどうかというところ——よかった、ハテナマークが頭の中でおどっているのは、わたしだけではないみ

たい。

もう一度、ひょい、という感じで、河野流瑠ちゃんが手をあげた。「『賢者』とか『賢者のメイド』とか、いったい何さか？」

こういうとき、すぐに自分の考えを言える流瑠ちゃんの元気の良さはすごいと思うし、同時にうらやましいなあ、とも思えるのだった。

流瑠ちゃんの質問に、なんとも言えない感じで反応したのは、拭乃さんだった。

「ああ、『賢者』を知らないのかよ。ジェネレーションギャップ、つてやつを感じるぜ」

「ふきちゃん、しかたないんじゃない？ わたしたちだって、先輩たちからお話を聞いたくらいでしょう？ ご活躍されたのは、けっこう昔のことみたいだし」

モップを抱えたまま、半眼になって眉を軽くしかめている拭乃さんを、菜花さんがおさげを揺らしてなだめている。

そんなメイドたちの様子を見ていた添華さんが、ハテナマークを頭の上にのせている、わたしたち三人の方を向いた。

「良い機会ですから、『賢者』について簡単に説明することにしましょう。知っておいて、損はないですから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9657z/>

BHT ～ 隻眼の天使 ～

2012年1月8日20時46分発行